

2018. 6. 5 (火)

## 「何のために学ぶのか」 & 「何をどう学ぶのか」

吉田 寿夫

### 自己紹介

吉田、寿に夫と書いて、「すしお」ではありません、「としお」と言います。今、打樋先生からご紹介があったように、社会心理学、それから教育心理学、心理学の研究の仕方である心理学研究法、こういったことを専門にしている人間です。臨床社会心理学という授業と、社会心理系のゼミに所属することになった人たちが受けることになる、心理学の研究法、心理統計に関する授業などを担当しています。

この大学に赴任する前は、兵庫教育大学という教員養成系の大学に21年間勤めていました。そして、主に活動している学会も、社会心理学会にも行きますが、教育心理学会という学会です。こういうことから、教育や学びのあり方といったことについて考える機会がわりとあったほうだと思っています。今でもそうです。それから、「なぜ学習者は専門家が学習に有効だと考えている方略を必ずしも使用しないのか」という長ーいタイトルの、勉強法についての研究の論文を書いたりしたこともある人間です（勉強法は、心理学では一般に学習方略と言います）。そこで、今日は、このような経験を通して考えるようになったことについて話をさせていただきま

す。普段はこういうメモを持って話すほうではないのですが、今日は欲張ってたくさんのお話しようと思っているので、なるべく効率的に話ができるようにメモを用意してきました。

大学生とは大学で学問を学ぶ者である（当たり前ですが）

打樋先生から今日私に提示されたテーマは、先ほどあったように、「大学生とは何者か？」です。そこで、他の人も、もしかしたらしているかもしれませんが、広辞苑で大学生という言葉を引きしてみました。そうしたら、「大学の学生」と書いてありました。そこで、次に「学生とは」ということで、学生を引きしてみました。そうしたら、「学業を修める者、特に大学で学ぶ者」と書いてありました。「それはそうだけれども…」という感じですね。

ですが、ポイントは、「学業、学問を学ぶ者」ということだと思います。もちろん、大学生のときに、学業だけでなく、クラブ活動、サークル活動、ボランティア活動、バイトなどを通して自分を成長させる、こういうことを否定するつもりはありません。でも、当たり前のことですが、「学業を修める者、

「学問を学ぶ者」ということが、やはり本来のことであり、第一義だと思えます。

それから、お説教めいた、余計なことになるかもしれませんが、世の中には、「自分を成長させ、社会の役に立つ人間になるために学びたい、教育を受けたい」と強く思っているけれども、それがままならない人たちもたくさんいる。そういう人たちのことを考えたら、今の日本の大学生のほとんどは非常に恵まれた状況にある、ということは認識しておいてほしいと思います（自分が大学生であったときの不埒さは棚に上げての話ですが）。

さて、「ということで、打樋先生からの問いに答えたので、今日の話はこれでおしまい」というわけにはいきませんので、ここからは「大学生とは大学で学問を学ぶ者である」という認識のもとに、大学で学問を学ぶ上で踏まえてほしいこと、考えてみてほしいことなどについて話をします。それは、「何のために学ぶのか」ということと「何をどう学ぶのか」といったことに関わることです。これらは、「事の是非とか、何を重視するのか」といったことであり、「実際にどうしているか、あるいは、どうなっているか」といった事実に関するものではありません。「どうあるべきか」といった物事の価値づけに関することです。ですから、価値観の相違という言葉があるように、論理的に唯一絶対的な正しい答えを導けるようなものではないと思います。でも、だからといって、「どう考えてもいい、各自が勝手に考えればいい」というものでもないと思います。論理的に唯一の答えが出せないことだからこそ、いろいろな人の話を聞いたり、本を読んだり、他の人と議論をしたりして、考えを深めたり、広げたりしていくことが必要だと思えます。そし

て、多くの人から不当だと見なされない、すなわち独りよがりでない考えを自分なりに形成していく必要がある事柄だと思えます。

今日の私の話も、あくまで私の意見、思い、願い、期待といった、言わば、「おじさんの主張」です。ですから、当然のことながら、絶対視をせずに、1つの参考にするものとして聞いてください。まあ、そんなに無茶苦茶なこととは言わないつもりですが。

そもそも、公教育はなぜ行われているのか

まず、大学に限ったことではありませんが、「なぜ学ぶのか」、言い換えれば、「何のために学ぶのか」という、学びの目的について問い直すと、「どういうことをどう学ぶのか」ということについての考えも、自然に深まっていくと思います。

では、皆さんは、将来子どもに「なぜ勉強するの?」と聞かれたら、どう答えますか。いい学校に入って、いいところに就職して、経済的に豊かな生活を送ったり、名声を得たりするため、将来なりたいものが見つかったときに、それになれる可能性を高めておくため、人格的に優れた人間になるため、高い教養を身につけるため、生活に役立つ知識を得るため、達成感を得るため、親の期待に沿うため、家族を喜ばせるため。

私は、「これらが間違いだ」とか「そんなふうを考えるべきではない」などとは思っていません。でも、今挙げたようなことだけであれば、どれも、自分や自分に近い者のためということであり、親や家庭教師などによる個人的な教育ではないものである公教育、すなわち、国や自治体などの公的機関の関与

のもとに広く国民に開放された教育の目的としては不十分であるように思います。そこで、「なぜ公教育がなされているのか」について考える必要があると思います。

まず、明治時代に日本において学校が作られた目的がそうであったであろうように、公教育なのですから、公、すなわち一般には、国家にとって有用な人材の育成という目的があると思います。これも、国というものが存在していて、国の状態が私たちの生活を大きく規定していることを考えると、否定されるべきものであるとは言えないと思います。個々人がまっとうなことをしないために、全体である国の状態が望ましくない状態になり、その結果、個々人に望ましくない影響が返ってくるであろうことから考えても、国家にとって有用な人材の育成のために公教育を行うということは、一理あると思います。

ただし、今日は今から言うことについてはこれ以上は論じませんが、「国家にとって有用とは一体どういうことか」、「現状では、国家にとって有用ということが国民全体の幸せにつながっていないのではないか」、あるいは、「そもそも、なぜ国家というものがあるのか」といったことなどについても、たまには問い直してみる必要があると思います。

それから、人類が構築してきた知の継承・進展といったことも、私は大事だと思います。さらに、特に義務教育では、「全ての人に公平なチャンスを与える」、「一般に不遇だと考えられる状況にある人も含む全ての人が、自己実現を自由に目指すことができることを促進する」、このようなことも公教育の重要な目的だと思います。

でも、最初のことと関係することですが、以上に述べたこと以上に大切だと私が思うこ

とは、「マスタリー・フォア・サービス (Mastery for Service)」ということだと思います。別にこの大学に雇ってもらっているからではありません。人は、この世に生まれてきた以上、基本的に他者や社会とのつながりの中で生きているし、そうせざるを得ないものだと思います（ただし、つながりを求め過ぎて、常にそればかりが目的になるのは、問題だとは思いますが）。そして、私たちは、多くの人と一緒に社会を形成し、かつ、その社会からさまざまな影響を受けています。ですから、当然のことながら、互いに支え合ったり、助け合ったり、協力したり、より望ましいであろう社会の構築に貢献したりする必要があるのだと思います。したがって、これまた当然のことですが、自分の言動の他者や社会に対する影響ということについて意識する必要があるし、自分のためだけでなく、今接している人や、周囲の人、さらには自分が属している集団や社会のためという意識を強く持つ必要があると思います。もちろん、自分のためということも否定されることではなく、大切だと思うとともに、「人間だけが社会の構成員ではなく、人間以外の動物、自然環境、これらも私たちの社会を構成しているものだ」という認識を持ったほうが良いと思います。

以上のことを踏まえると、「他者のため、社会のために資する人間を育む、より望ましいであろう社会の構築に貢献できる人間を育成するために公教育は存在している」と思います。そして、学ぶ側から言えば、「他者や社会の役に立つ人間になるよう自分を磨くために学ぶ」という、まさにマスタリー・フォア・サービスということになるのだと思います。

さらに言えば、「ふだんは政府や組織といったお上の言うことを無批判に受け入れ、問題が生じたら不平を言う」というような、大衆や庶民と言えるであろう人ではなく、「社会をより望ましい状態にしていくことに、主体的に、かつクリティカルに寄与できる市民の育成」ということが、公教育では重要だと私は思います。原発の問題などでも、専門家や政府、政治家だけに任せては危険だということが、だんだん分かってきたと思います。一人一人が市民として考えて行動していくことが必要であり、そのための姿勢、価値観、知識、スキルなどを個人に育むのが公教育だと思います。義務教育はそのベース作りであり、大学でも基本的には同様だと思います。自明のことを言っているにすぎないのかもしれませんが、まずは以上のようなことをこれまで以上に強く意識してほしいと思います。

## 何をどう学ぶのか

それでは、最後に、「何をどう学ぶのか」ということについて話します。これについては思いがたくさんありますが、時間がないので、特に思っていることのみを話します。

私がまず皆さんに強く望むのは、「プロセスを大切にしてほしい、さまざまな面でのプロセス、過程ということについて考え、過程について学ぶという意識を強く持って学んでほしい」ということです。皆さんは学生です。ですから、在学中によい結果を出す、よい結果を得る、それも大事ですが、それ以上に、よい結果を出せるようになる、それが、より重要だと私は思います。すなわち、よい結果を出せるようになるための姿勢、知識、

スキルなどを獲得するということが、学生にとって、より重要なことだと思います。

もう少し具体的に言うと、考える目的や考え方、考える道筋、考える際の留意点などについて考えてから考える。話し合いもそうです。話し合い方について考えたり、話し合ったりしてから話し合う。本などを読む場合も、読み方について考えてから読む。自分が書いた文章を推敲する場合も、推敲の仕方について考えてから推敲する。このようなことを通して、学びや探求活動のプロセスをより洗練されたものにしてほしいと私は強く思っています。

こういったことに関連することを、もう少しお話ししますが、学び方ということを問い直すことも重要だと思います。最初に言った勉強の仕方、心理学で言う学習方略ということで、失礼ながら、多くの人はこのことについて改めて考えることをせずに来てしまったのではないかと思います。そして、ややもすれば、「目先のテストでいい結果を得る」、「とにかくたくさんやる」、「とにかく覚える」という、結果主義、物量主義、暗記主義と言えるようなものに陥っていた人がたくさんいるのではないかなと思います。これでは、学びが労役になりかねません。「分かった」とか「なるほど」といった理解の進展についての認識が生じないために、「面白い」という感覚に付随した、やる気、動機づけが高まりにくいと私は思います。

それから、こういったことに関係して、意味理解ということが大事だと常々思っています。ここでの意味という言葉には、私は2つの意味を込めています。1つは意義、もう1つは論理と言い換えられることで、とかく私たちは、ハウツーや、すぐに役立つという

ことばかりに目が行きがちだと思います。やり方、すなわち手続きが分かり、それを機械的に適用することができるようになることだけではなく、「なぜそういう手続きになっているのか」、「そうすることの利点は何なのか」、「そういう手続きで行わないと、どのような問題が生じるのか」という意義と、「その手続きは、どのような理屈で考えだされているのか」という論理、この2つについて理解することが重要だと思います。要は、「何でそうするの？」という、「Why を大切に」ということです。

それから、関連づけをしながら学ぶということが大事だと思います。唐突ですが、寒流のところと暖流のところは、どちらのほうがよい漁場になると習いましたか。時間がないので、こちらから、即、答えを言いますが、寒流と暖流がぶつかる潮目がいいというのは置いておいて、寒流と暖流を比べたら、寒流のほうが一般によい漁場になると言われています。それから、コカ・コーラなどのような炭酸飲料は、温かいときと冷えているときでは、どちらのほうが刺激が強くて美味しく感じるか。当然、冷えているときですよ。では、今提示した2つの事柄はどうつながるのでしょうか。実は、砂糖やミョウバンなどのような固体の溶解度は温度が高いほど高い、つまり、水によく溶けますが、気体の溶解度は逆で、温度が低いほど気体は水によく溶けるそうです。ですから、温度が低い寒流のほうが、酸素が水にたくさん溶けている。だから、生物がたくさん生息できる。それから、温度が低いほど  $\text{CO}_2$  がたくさん水に溶ける。だから、炭酸が強くなる。だから刺激があって美味しい。このように、一見無関係なことをいろいろつなげていくと、「ああ、

分かった」という感覚が育まれやすいし、なかなか忘れにくいと思います。こういう関連づけた学びをするというような意識も持ってもらえたらと思います（以上は、次に紹介する麻柄啓一さんの受け売りです）。

それから、早稲田大学にいらっしゃった麻柄啓一さんという人は、『じょうずな勉強法』という本の中で、「勉強とは頭の中に百科事典を作るのではなく、日記を作るつもりで、感情もくぐらせながらやるといいですよ」ということを述べていらっしゃいます。時間の関係でこれ以上は話しませんが、これがどういうことなのか、よかったら麻柄さんの『じょうずな勉強法』という本を読んでもらえたらと思います。

また、「答えを知る」ということも大事かもしれませんが、「答えを出すためにどう考えるのかということを知る」ということも大事だと思います。たとえば、「どのようなことが差別で、どのようなことが差別ではないか」ということを人から言われて、それを無批判に受け入れるのではなく、「差別かどうかということについて、どう考えたらいいのかを知る」ということです。先に話した「なぜ学ぶのか、なぜ公教育が存在するのか」ということも同様で、私が述べたことを無批判に受け入れるのではなく、自分なりに考えられるようになることが大切だと思います。そして、その際には、「学ばないと、または公教育が存在しないと、どうなるのか、自分や他者や社会にどのようなことが生じる可能性が高くなるか」、このようなことについて多面的に、かつ、短期的な影響だけでなく長期的な影響についても考える、こういう考え方を身につけることが重要だと思います。

それから、学問によって得られた知見、す

なわち学問の結果のみでなく、「その知見がどのようにして見いだされたのか」、「そのような知見を見いだす際に、どのようなことに留意する必要があるのか」、こういったことを大学教育の中では重視して学んでほしいと思います。そして、これまでに見いだされた知を継承するだけでなく、「自らが新たな知を創る、社会全体の認識の進展に資する」ということも重要であり、このようなことにつながるであろう知識を獲得してほしいと思います。このようなものが、知性と言えるものではないでしょうか。

以上、欲張って、いろいろなことを話して

きました。「不合理について学ぶことの重要性」といったことなど、他にもお話ししたかったことがあるのですが、時間の関係で、割愛します。

「大学で学んだことは役に立たなかった」と言う人が、たまにいます。でも、「役に立つような学びをしなかったからではないか」、「役立つということの意味を的確に捉えていなかったからではないか」、こんなことも踏まえて、これからの大学生活を送ってください。

(社会学部教授)